



# ピクタインダカン

(おきみがりにぼし)

第15号

発行日 2018年6月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

## 蕨

山地に群生する蕨

陽光につつまれた茂みのなか  
まだ眠っているシダを目安に  
早春の点るいのちを探す

藁色の斜面を注視すると

夢をみている薄緑の若芽

少し先に目をあそばせると

数本の濃茶色の蕨が陽にひかっている

身がかがめ手を伸ばすと

茂みの棘が背中を突き立てる

もの言いたげな老いた蕨のまなざしも

風がわずかにゆれ

汗ばんだからだの向こうに

五月の雲がぼんやり浮かんでいる

濁黒 (KURO) IV

\*

いまだに

わたしの傷は癒えず

凍土のように堅く、冷たく、閉ざされた心で

濃密な濁黒を生きねばならない

絶望を迫る言葉に

頭のなかが狭くなり

必死に

みずからに呼びかけていた

助けてよ！

わたしのなかに稲妻のような電流が流れた

中央の行政機関

凜とした文字が

一筋の光を投げかけている

わたしに残された武器はペンのみ！

これは

労災未認定者のわたしの

最後のたたかい

手紙には

事実が形骸化された不条理を

当該事故の建物をすぐに修繕した不正義を

真実が証明できない悔しさを

権力や財力もなく

後ろ楯のないわたしの惨めさを

救い上げてもらえない弱者の苦悩を

糧を断ち切られたわたしの苦しい窮状を

どこまでも視界の利かない闇を泳ぐ恐怖を

後遺症がもたらす激しい苦痛と葛藤を

組織に個人が立ち向かうからには

相当の覚悟が要る

鉄よりも堅い意志と

反骨の毅然とした態度で

折り重なる痛みと真情を訴えた

たとえ

応えが返ってこなくても

だまっとうずくまっとうているよりは……

弱いものでも

自分の立つ位置ぐらいは

みずからが決める

これはだれにも譲れない

わたしの信条

\*

鶏の羽をむしるように

濁黒はわたしの魂を少しずつ蝕み

わたしの居場所は

厳しく閉ざされていた

あしたが見えない凍えた場所に

敵の兵士は

法の土をこね上げ

鉄柵を巡らし

文字を届け

声を送り

極限の孤立を積みあげた

ころぼそい日々が

わたしを鉄柵に押しつける

\*

「正式に調査する！」

不意に

一通の通知を受けとった

十二月のかすんだ光が

諦めていた わたしの  
魂の  
うえに

\*

沈黙する風  
交錯する魂  
停止した時間  
一ヶ月  
二ヶ月  
三ヶ月  
ひたすら待つ  
そして  
待つ

\*

眠れぬ明け方

夜明けを告げる鳥の  
凄烈な鳴き声を聞いた

労災認定！

半ば諦めていた  
わたしの真実が認められた  
外部の五名の  
専門委員会で決まったという

ひとり暮らしの  
後ろ楯のいないわたしが  
組織には  
すべてに都合がよかつたのだろう  
けれど  
歪められた事実が  
つきつぎに  
透明なことばで  
正しく書きかえられた

諦めていたなら

眞実を質すことなく

だれにも知られぬままに

運命を背負って

生きていくしかなかつただろう

巨大なものとの

たたかいが終わったとき

わたしは

はじめて知った

眞実にも

時効があることを

時効は

数日後に迫っていた

\*

濁黒とのたたかいは

翳濃く残っていた

まだ濁黒は生きていたのだ

黒色に濁った世界を

怪我が治ったことのように

気にかげずに過ごすのは

無理だった

いちど蟻地獄の底にすべり落ちた心は

簡単には這い上がれない

どんどん増殖する翳の群れ

巨大な生きものの

ぬめり気のある息吹が

煙のように心の洞窟に吹きかかる

極夜

ひとつのたたかいは終わった  
が

\*

当初

相手を許すことができていたなら

これほどまでにひどく

濁黒にとりつかれたりはしなかったのだろうか

刻まれた黒い記憶

喪失した魂の悲傷

どん底へ追いやられた苦悶を考えたとき

到底許容<sup>ゆるし</sup>などできない

\*

濁黒の鎖につながれ

逃げだせない

檻の外からなげかけるひとの

視線が怖い

髪の色も

声の色も

心の色も

好きな色も

明るい景色も

みんな奪いとられた

地下牢のなかで

つめたい床に這いつくばり

真つ青な獣の心になって

生きながらえ

生きていくしかないのか

\*

濁黒は

わたしの息の根を止めるまで

攻撃をつづけてくる

\*

黒い記憶を忘却できないまま

いくつもの季節が過ぎていった

もはや恢復には

時間がかかると気づいたとき

不思議と

濁黒が遠くに見えた

生への執着心がわく

濁黒のなかに

みずからが生き

もう一度

光を追う向日葵のように

あかるい未来へ

\*

心に頑丈な塀をめぐらせれば

濁黒でも

侵入してこないだろう

この小さな思いは

思いがけない重みで

わたしに平安をあたえた

生活の輪郭が描けないなか

わたしは

自分の好きな色彩の

ことばで

絵を描きはじめた

ふりはらつてもふりはらつてもふりはらつても

消えない

おいつめられた苦しみ

しめつけられた悲しみ

わたしがわたしでいられない

やりきれない怒り

そのすべてをさらけ出し

わたしの傷口を

ことばの掌で

やさしく洗い流すようにつとめる

\*

今日から

わたしは矢代レイ

仮面をかぶった

わたしに

だれも気がつかない

自由に

詩の空を飛ぶ

もう一人のわたし

仮面を脱いだ

わたしは

買い物ひとつ

狭い町さえ闊歩できない

口角を上げることもしない

ビクビクする逃亡者のように

日常を死んでいた

\*

事故のじの

濁点のひとつ

さえも書けなかった

わたしが

詩のなかで

ジコ

と書けたら

少し強くなれた

\*

初夏

長く見なかった

川がやさしく迎えてくれた

水は光をちりばめて

ひとつに繋がって流れていく

水は

わたしの傷を知っているだろうか  
わたしのなかにも

失ったものを繋ぎ合わせるための  
水が流れているのだろうか

\*

強張るからだに

言いきかせ

思い切つて町へ出かけた

拒否する匂いがあふれていた

組織の人間と

いつ会うかもしれない

全身が鉛の服を着たように重い

動物の感覚で

安全なところを感じとり

人気の少ない路地を通る

\*

忌避するからだは

地雷探知機のように

瞬く間に

わたしを捕まえにやってくる

危険を知らせる

\*

わたしに向かつて

非難の風が突き刺さってくる

立ってられないほどに

吹き荒れて

冷えて固まり

わたしは瀬戸物のように欠けた

捨てなさい

砂漠のような町がなくなっても

生きられる

庇護者の声がひびく

これ以上の苛酷な環境では

心がとけて

呼吸ができない

みずからの回復のため

すべてと訣別

居住地を立ち去ることに決めた

友よ

川よ

セメント色の

ゴーストタウンよ

わたしは向かう

いつさいを捨てて

未来の風が吹く街へ

転居

\*

引越した街が

一望できる窓から

透明な風がはいつてくる

わたしのなかに浮いていた塵が

いま

わたしの外で光っている

\*

蒼白く痩せたひとは

しずかな居場所では

木綿のような一枚の心を

繕っている

\*

信じられるものへ

心をひらけ

光のささやき

透きとおる風

自然との交感

差しだされる掌

わたしを支えてくれる

たしかな言葉

まだ失われていないものに

歌いかける

\*

くたびれた年月が

わたしを海底へと連れていった

身近に

深海魚が泳いでいる

黒い紐がゆらめくように

水のなかに

ゆっくり降りていく

わたしもあとを追うが

息がきれ

黒い深海魚を一匹つかみ

海面へ

深海魚が

魔法をかけられたように

赤い

光りの色をはらんだ深海魚は

掌のなかで

水を欲しがっている

わたしの深奥に棲む

光をとらえられない濁黒も

ふかい海底で

鎖の翳をはずせないまま

生きつづけているのか

①  
人生は重い腹を抱えて  
山に登るが如し

②  
倒れない！  
なぜ？

心についた筋肉の  
杖が支えているからサ

【あとがき】

五月二日付けの秋田魁新報に、「ピッタの会」の勉強会が掲載された。その中の、「真剣だからこそ、時には…」のくだりに、少し補足したい。

荒川洋治は一人の詩人に多くの研究者（特に大  
学教師ら）が群がる事態、そのような崇拜を痛烈  
に風刺している。決して宮沢賢治を批判したもの  
ではないが、「宮沢賢治は世界を作り世間を作れ  
なかった」から、変わり者として石を投げられて  
も仕方のない、価値も分かってもらえない、そんな  
側面も併せもつたのではなかつたらうか。

\*

ある会社の話。先輩は後輩を育てることに力を入  
れ、後輩はみずから励むことに努めているとい  
う。育てることは会社の向上を図り、優秀な人材  
を確保することにもつながる。

互いがともに協力して育つ環境を整えば、屈折  
した思考など存在しない。豊かに  
自由に生きられる。悩める  
わたしは、そんなことを考え  
ながら話を聞いていた。

